

249) 海はわたしの生命

まっ赤なボード小脇に抱え	あの人は南の海からやってきました
波から波へ潮風みたいに	空を舞う海の男はまぶしかったわ
若かったのねわたしは彼に	いつの間に夢中になって恋していたの
サンドイッチを車に積んで	彼が待つ ^{くじゅうくり} 九十九里まで走っていった
夏の光は若い二人を	祝福し長い時間が過ぎていったわ
二人っきりの海は楽しく	砂浜に夜が来るまではしゃいでいたの
9月のある日海が怒ってキバを ^む 剥き	サーファーたちに ^{おそ} 襲いかかった
海を愛して海に沈んだあの人は	生まれ変わって貝になったの
そうして波は砂に残した	あの人の足跡までも消してしまった
海はわたしの夏物語	呑み込んですべてのものを涙にかえた
それでもわたし哀しいときに	海に来て海の香りを確かめるのよ
嬉しいときも苦しいときも	^{とき} 歳月を越え海はすべての始まりだから
人は海から生まれてきたと	あの人は海を見ながら教えてくれた
人は海へと ^{かえ} 還って行くとあの人の	サーフボードが物語ってる
海はいつでもわたしの恋人	あの人の思い出ばかり詰まっているの
海はいつでもわたしの恋人	あの人の思い出ばかり詰まっているの
海はいつでもわたしの ^{いのち} 生命	あの人のすべてのものがそこにあるから
海はいつでも人の ^{からだ} 安らぎ	人間の心と身体のみなもとだから